

「旧真田山陸軍墓地芸術プロジェクト」 — 舞台芸術を用いた〈他者〉との対話の場の構築と継続 —

旧真田山陸軍墓地芸術プロジェクト

■活動内容

本活動は、旧真田山陸軍墓地に関連する芸術作品を創作・上演することで、当該地と第三者との出会いの場を拓き、議論と対話の場へとつなぐことを行っています。プロジェクトには制作メンバー2名（岡田蒨子、山崎達哉）とアーティスト2名（高安美帆、筒井潤）が所属しており、どのような企画を進めるかを決めています。

活動の中では、「旧真田山陸軍墓地」の場とアーティストが出会い、独自の観点を見つけること、観客の知覚や認識を過度に方向付けない創作を目指すことの2点を重視しています。

■コンセプト・ねらい

「旧真田山陸軍墓地」は大阪市にある日本最古の「陸軍墓地」ですが、国家と個人を巡る「記録」と「記憶」が複層的に集積する特殊な時空間です。その複層性ゆえに多様な立場や価値観の人々が場集いますが、その複雑さゆえに異なる意見を持つ者同士の対話の場が拓かれにくいこともあります。本活動は、そのような「複層的な記録／記憶の集積の場」を巡る舞台創作を通して仮設的な記憶の共同体を試作することで、対話を誘発し、更なる対話へとつなげる目的を持っています。

■活動実績

2024 年度は、高安美帆が創作を担当し、旧真田山陸軍墓地と第三者との出会いの場を拓きました。2024 年 4 月～9 月は高安とプロジェクトメンバーを中心に街歩きや研究会を重ね、旧真田山陸軍墓地や上町台地の理解を深め、創作の焦点や方向性を模索しました。11 月頃に上演場所やスタッフ、出演者を決め、2025 年 3 月 20 日（祝・木）に、TSUBAME HOUSE HOSTEL（玉造つばめの家）で企画「上町台地にある旧真田山陸軍墓地と積み重なったまちの記憶をツバメと旅する春」を開催しました。当日は、高安が演出を担うパフォーマンスと岡田が担当した対話の時間の他、舞台美術家の高橋かほりが作った舞台美術の展示、歴史研究者の堀田暁生による墓地レクチャーも開催しました。

各企画の概要は以下の通りです。

○メイン企画①—パフォーマンス（街歩きと室内パフォーマンス）（11:00～12:30、15:00～16:30、約 90 分、参加料：無料、定員：各回 15 名）：スタートは「玉造つばめの家」。俳優らが演じる 2 羽のツバメに導かれ、観客は旧真田山陸軍墓地や周辺の街内を歩きながら、街が持つ歴史や、地中に埋まる人の存在、人が開発する以前に広がっていた自然や情景（桃の花、深い谷など）を想像します。40 分程度歩いた後、「玉造つばめの家」に戻り二階で上演を観ます。上演は触地図を使って歩いた道を回想することから始まり、街歩きの時に触れた被埋葬者が書いた手紙の写真を見たり、記録に無い部分を高安が想像して演劇的に示したりします。複数の手段で旧真田山陸軍墓地とその周辺の記憶と記録の重なりが可視化されていくような公演でした。

○メイン企画②—対話の時間：終演後は対話の時間として、触地図に触れたり、1 階で善哉を食べながら感想を話し合ったりする時間を作りました。善哉のふるまいは、祭で参加者に酒や食事がふるまわれる「直会（なおらい）」をモチーフにしており、共食を通して緩やかで臨時的なコミュニティを形成することを意図したものです。また、紙とペンを用意し、観客が「誰かに伝えたいと思ったこと」を書いて壁に貼られたロープにつるす場所も作りました。

○展示企画—1 階「参加者による誰かに伝えたい一言」2 階「触地図」（作：高橋かほり）（10:30～19:00）：上演以外の時間は展示企画を行いました。1 階ではメッセージを書く場所と上演の感想掲示、2 階では舞台装置の「触地図」の公開を行いました。触地図には触ることができ、上町台地の立体感を体感できます。展示だけを観に来た人が感想を書いたり読んだりすることで、企画に参加することができる空間作りを目指しました。

○関連企画—墓地レクチャー（13:30～14:30、参加料無料、講師：堀田暁生、場所：旧真田山陸軍墓内集会場）

NP0 法人旧真田山陸軍墓地の保存を考える会に所属している歴史学者が、旧真田山陸軍墓地について概説するレクチャーを実施。上演で感じた内容を深める機会としました。

■成果・効果

本活動は、旧真田山陸軍墓地に関連する芸術作品を創作・上演することで、当該地と第三者との出会いの場を拓き、議論と対話の場へとつなぐことを目的としています。

上演場所の狭さや街歩きというパフォーマンスの性質上、各回の定員は 15 名と限られた人数しか参加できませんでしたが、定員を超える参加希望が集まり、45 名の方に参加をいただきました。参加者には幅広い年齢層の方、地域の方、歴史研究者、演劇関係者と多様な方々がおられ、皆でゆったりとした対話の場を拓くことができました。

その場で書かれた感想用紙や、後にプロジェクト関係者に届いたメッセージには、様々な感想がありました。例えば、地域住人の方は、街の捉え方が変わったと感想を書かれておられたり、演劇実践者の方は、街歩きと街歩きの後の演劇の相乗効果の面白さに言及されたりと、観客によって、何をどう楽しんだかが多様であったことがわかりました。本公演では観客の知覚や認識を過度に方向付けないことを重視しつつ創作をしていたのですが、上演後の感想からは、そのような創作者たちの問題意識をうまく作品の形に落とし込め、参加者に伝えることができていたことが推察されます。感想の中でも特に、旧真田山陸軍墓地を長年研究してきた歴史研究者が、上町台地という広い文脈の中で旧真田山陸軍墓地を捉え直す今回のパフォーマンスを見て、今までの自分の研究が旧真田山陸軍墓地の墓碑ばかりみていたことに気がついた、と書いていたメッセージが印象に残っています。この感想からは、本企画を通して、参加者の中に新しい視点が生まれたことがわかります。

このように、当日参加してくださった方々からは、様々な意見や感想、話題があふれ出た場となりました。また、創作を担った高安美帆を含め、様々な関西圏のアーティストが本作の創作に携わり、意見を交わしました。創作過程も「出会いの場」と考えると当日の観客数以上の人々が場との出会いを果たすことができたといえるでしょう。

観客数が限られ、数値的には小規模な受益者数となりましたが、本企画の「当該地と第三者との出会いの場を拓く」という目的は、質的には十分に達成できたといえるのではないのでしょうか。

■今後の展開

参加した歴史研究者の方々から、創作者たちと歴史研究者たちとの座談会を行いたいという声があがっており、5 月以降に座談会を行う予定をしています。また、再演を希望する声もあがっているので、何らかの形で発展的な企画を計画する予定です。今回の企画は地域のみなさんとの交

流の最初の一步となったように思いますから、この企画でつながることができた地域の方と、芸術を媒介に場を共有していけるような企画を立てることができたらと考えています。

プロジェクトの展開としては、2023 年度に創った作品の再演が 2025 年度に予定されているので、本年度は新作を作り続けるというよりは、創った作品を無駄にしない形で、継続的に場を拓く形で企画をしていきます。同時に、今までの実践を振り返って検討し、論文の形でまとめる予定をしています。今年実践した企画は、「萌芽」です。この萌芽を育てていけるような方向性を模索し、構想していこうと考えています。

○資料写真：パフォーマンス（写真は全て石井靖彦撮影）

①出発



②吉岡塗料店のツバメの巣の下で。巣の下に居る演者二人（左 石原菜々子、右 高安美帆）は2羽のツバメという設定



③街歩きは明治時代の古地図を持って。



④旧真田山陸軍墓地の中。墓標を読む。



⑤小学校の崖の方へ。昔は墓地エリアだった場所。



⑥崖にはまだ被埋葬人が眠っている可能性がある。



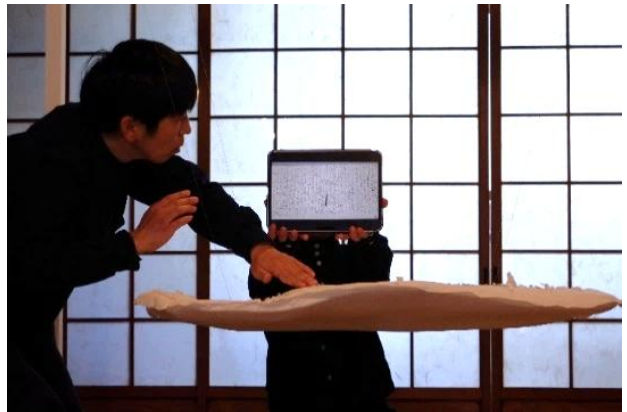
⑦昔の軍用道路の隣を歩く。



⑧墓地を裏側から見る。裏側エリアには昔避難舎があった。大きな木の上にはカラスの巣。



⑨戻ってきて室内パフォーマンス。触地図を使い、歩いてきた道を辿る。埋葬者たちの記録に触れたり…。



⑩終演後は、対話の時間。おぜんざいを食べたり、触地図を触ったりしながら、感想を共有。感想を書いたら、後ろの壁に吊して展示。右の写真の中で、触地図を指さしている人物は高橋かほり。



○当日パンフレット／街歩き用の地図（製作：中村詩おり）



○資料写真：触地図（製作：高橋かほり）（写真は全て石井靖彦撮影）



○歴史研究者堀田暁生による墓地レクチャー。上演と上演の間に、別会場（墓地内集会場）で実施。（写真は全て石井靖彦撮影）



写真の左側はドラマツルク・地域コーディネーターで参加した岡田祥子。右で座っている人物が堀田暁生。